

〔巻頭言〕

## 東日本大震災における SPF 豚農場の取り組み

井 上 忠 恕

東日本大震災でご逝去されました方々のご冥福をお祈りいたします。また、被災されました皆様に心からのお見舞いを申し上げます。

日本 SPF 豚協会主催の平成 23 年度の SPF 豚セミナーにおいて、「東日本大震災の体験を活かして」と言うパネルディスカッションで、あらためて未曾有の被害を生々の声で拝聴することができました。

いずれの農場でも最大級で、まさに想定外の被害にもかかわらず、職員の方々の創意工夫と献身的な努力で短期間に復旧・復興へ向かっている様子が手に取るように分かるとともに、一つ一つが深刻で大変なことばかりでした。ご家族も被害に遭った方々のなかには、豚の命を守る農場の作業を優先されたことや、職員家族も含めて共同で炊き出しをして助け合いながら急場を乗り越えられたことなど危機管理の基本を教えられました。

勿論、SPF 豚農場であるから認定農場の防疫を維持継続し、安定供給に寄与しなければなりません。いずれの農場も防疫の基本である防疫設備基準や防疫管理基準の原則を守りながら最大限の努力をされていました。しかし、その基準はライフラインである電気、水道、通信、物流などがあくまでも普通に当たり前のような時を想定していません。温水の出ない風呂、シャワーや洗濯が頻繁にできない作業用衣類の対応、さらには非常時の入

場規制など枚挙に暇がありません。

また、必要な諸機材の入手や飼料の供給、さらには出荷豚の手配などにはいずれの農場も多くの関連会社などの絶大なる協力を得ています。それは東日本の近隣に限らず、全国にわたっています。普段からの相互の信頼関係によるものでしょう。また、家族を含めた日常生活物資の善意の支援も続けられていました。

しかし、なんとと言っても強力な助っ人は普段から豚に接し、日々作業している従業員の皆様でした。健康状態や発情などの生産状況を熟知している従業員は、この緊急時でも冷静な判断によりその場をしのぐことができました。施設、設備、機器の損害の大きい所では、必ずしも外部業者に依頼できない状況で、普段から機器の設置、調整、修理に当たっている方々の技術が短時間に有効に生かされたとのことでした。

いずれにしても、どの農場でも甚大な被害のもと、何としても SPF 豚としての位置づけを守り続ける強い共通認識のもとに賞賛すべき一人一人の努力を惜しまなかったということによるものです。

東日本大震災という不幸を契機に、せめては絶対安全神話から卒業しようではないでしょうか。そして、これらの貴重な危機管理への経験は後世に語り続けられるように望みます。